

地域との連携

地域の発展に向けた取り組み

金融機関との新たな連携

キーワード：地域連携・金融機関・技術相談・地域力連携拠点

本事例の関係者

山形大学
地域共同研究センター
米沢信用金庫
産学金連携
コーディネーター
商工会議所
文部科学省産学官連携
コーディネーター

地域力連携拠点事業で地域を活性化

【要約】

山形大学では連携協力協定を結んだ金融機関とともに大学認定の産学金連携コーディネーター制度の構築を行い、23名の産学金連携コーディネーターを輩出した。平成20年度、連携のメリットを活かして、大学で全国初の取り組みとなる地域力連携拠点「産学金連携横町」のプロジェクトを推進し、疲弊する地域経済の活性化に取り組んだ。コーディネーターは長年にわたる中小企業支援の経験を活かし、統括応援コーディネーターとして事業の推進役を務めた。

【きっかけ】

●産学連携に形無し、自由な発想が新たな連携を生み出す

- ・地方大学と地域の金融機関、「地域への貢献」、「地域産業の活性化」という同じ目的を持つもの同士が連携協力協定を結び、地域への新たなかわりを模索していた。お互いの得意分野を活かすことによって、さまざまな連携の形が生まれる。
- ・県内企業の多くは景気の影響を受ける下請け型企业であり、コア技術などを活かした研究開発型企业への移行が望まれている。

【段取り・ポイント】

●連携の仕組みを構築

コーディネーターは関連機関の人材ネットワークを整備して、連携の拠点を形成した。

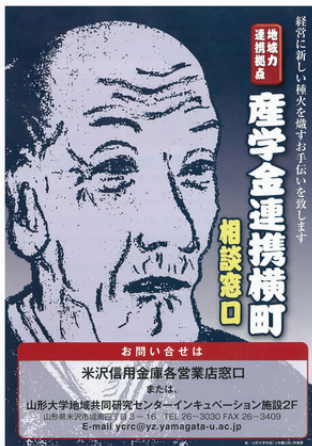
●地域へ情報発信と支援事業の展開

米沢信用金庫支店窓口、全国の信金ネットワーク、山形大学のサテライトを活用し拠点事業のPRを実施、ビジネスチャンスの創出、市場開拓、ビジネスマッチング等のセミナーを開催して情報を発信すると共に企業相談会を実施した。相談企業に対しては産学金連携コーディネーターと一緒に企業を訪問して、企業の課題を顕在化し経営改善に取り組んだ。

【成果・結果や活動後の変化】

●中小企業・大学・銀行それぞれに連携のメリットが

産学金連携横町セミナー、企業相談会を定期的で開催したこともあり地域の中小企業にとって大学が身近な存在となった。また、今まで技術的な相談が中心であったが経営全般の相談に対応した事により企業との信頼関係がより醸成されたといえる。「産学金連携横町」を開設後、半年間で200件を越す相談が寄せられ共同研究に移行した事例もみられた。



産学金連携横町
相談申し込み用紙

「産学金連携横町」事業展開

産学金連携セミナー・相談会開催
6回
相談件数291件
(平成20年度)
本事業における共同研究契約締結件数 4件

地域力連携拠点 -産学金連携横町-

産学金連携横町の3ステップ

◎ステップ1

経営の悩みを相談してください!

収益管理を強化したい・新規事業を立ち上げたい・経営革新を申請したい・市場調査をしたい...等々

◎ステップ2

自社の強み、弱みを知りましょう!

貴社の強みと課題を診断し、解決に向けた道筋を、わかりやすくお伝えします

◎ステップ3

課題を克服し、ステップアップしましょう!

課題に応じて、コーディネーターが支援策や専門家につなげていきます

図 産学金連携横町 支援の流れ

成功の事例

地域内外のネットワークが推進力へ

●互いのネットワークを共有

コーディネーターの財産は人と人とのつながりといえる。一人でできることには限りがある。事業を推進するにあたり、企業から寄せられる幅広い相談に対応できたのは、専門知識を持つ教員はもとより、連携協定を結んだ金融機関からの連携戦略研究員、山形大学認定産学金連携コーディネーター、他制度のコーディネーター等のネットワークを活用できたことが大きな要因といえる。

●産学金連携セミナーがサロンの役割を

意欲的な企業が参加する事で、セミナー終了後の交流会がサロンの役割を果たしている。参加企業の親交も深まり情報交換を行う事で、地域内外の連携へ発展し、取引の拡大や新たな商品開発へ繋がっている。

●相談企業のモチベーションを喚起

様々な相談が寄せられる中、コーディネーターが最も配慮しなければならないのが企業自らの「気づき」を促すこと。大学に丸投げ、大学が何とかしてくれるという姿勢では成果は出てこない。コーディネーターは短期的目標と中・長期目標をしっかりと見据え、支援企業のモチベーションを鼓舞し続けるためのフォローを行い相談企業が主体的に活動する環境づくりに心掛けた。

地域との連携



セミナー風景

失敗の事例

企業と大学の接点の見極めを

●コーディネーターとしての責任

企業から寄せられる相談は実に幅広い。企業の未来を創る事業戦略の立案に応援コーディネーターはどこまで責任を持つのか？事業拡大や新しい分野へ踏み出す前向きな場面（提案）もあれば、「事業縮小・撤退」を余儀なくされ判断を迫られる後ろ向きの場面も出てくる。

ボーダーラインに立つ判断を迫られたときは経営者と共に胸が苦しくなる場面もある。

●技術相談の対応

中小企業の経営者は多忙でメールやファックスでの相談申し込みよりも、電話での相談が多く、コーディネーターの理解が不十分であるが故にマッチングを行う教員の選定を誤ることがあり、教員と相談者の双方に迷惑をかけた。立場を認識して、確認を怠ってはいけない。

成功と失敗の 分かれ道

プロジェクトを成功に導く近道は横の連携をうまく活用すること。コーディネーターが持つ人材ネットワークが成功の鍵を握る。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

新たな連携の形を求めて

●地域と共に、地域への思いを形に

全国316拠点の中で唯一大学が取組んだ「地域力連携拠点事業 産学金連携横町」という新たな取組み。

大学の地域連携のあり方、知の活用のあり方には決まった形は無い。地域、連携する相手、大学の取組みの姿勢など、連携の形はケースバイケースで、進化（深化）させていきたい。

●横のつながりが成功への近道

プロジェクト成功の鍵は横のつながりである。縦割りの組織では超えられない壁でも複数にまたがる機関からなる人材ネットワークを活用すれば、解決の糸口が見つかり成功への近道となる。

☆コーディネーターの一言

地域における大学の役割、連携のあり方は係る人によって様々な形となる。大切なことは形ではなく思い。思いが伝わり初めて連携が進む。